

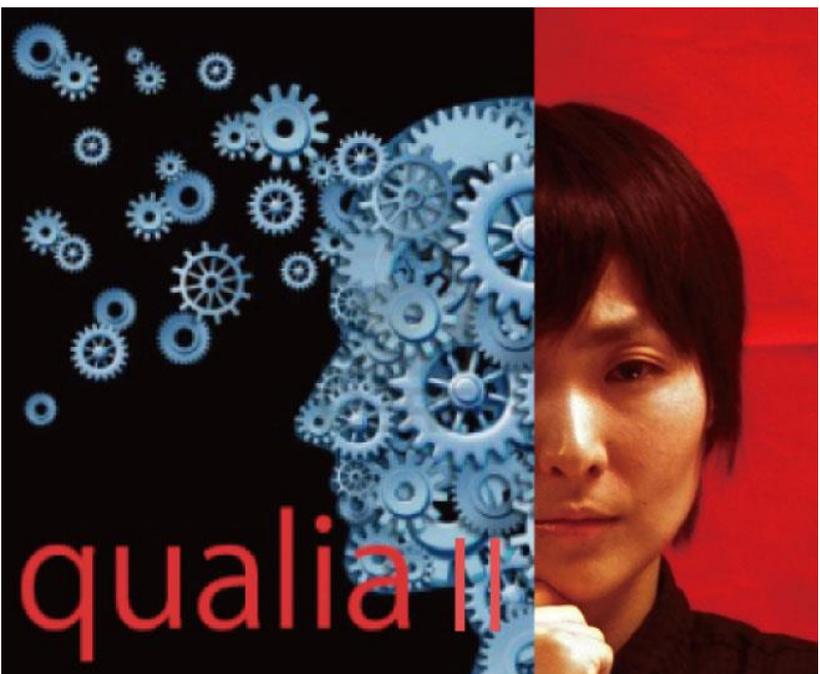
# EN&ONプロデュース公演

## 『クオリア II』

作・演出 春田鮎

### キャスト

|       |        |
|-------|--------|
| 澤リカ子  | 緒形まひる  |
| 榎田秀司  | 水海冷美奈  |
| 日下部太一 | 小林竜之介  |
| 刑事    | 丹羽梢    |
| 検察官   | 片野大輔   |
| 赤井喜和子 | 戸崎奏音   |
| 柏木峰子  | 大久保さゆり |
| まり    | 神谷富士乃  |
| カズマ   | 雨宮みき   |
| ユリ    | 渡部晃乃   |
| 少女    | 得田滯花   |
| 磨木医師  | 松島才華   |
| 研修医   | RUKA   |
| シスター  | 岡壁杏依   |
| 看護師1  | 石坂萌那美  |
| 看護師2  | 松山莉央   |
|       | 奈珠なずな  |



### 登場人物

澤リカ子：榎田秀司の一番弟子 精神科医でもある

榎田秀司：天才的な脳科学者 自殺と判定され

日下部太一：帝都新聞に勤務する新聞記者 澤リカ子の大学の後輩

刑事：クオリア薬害裁判の担当刑事 元交通課 多忙を嫌う

検察官：クオリア薬害裁判を担当する検察官

赤井喜和子：カズマの姉 アメリカン製薬を訴える原告団の一人

柏木峰子：厚生労働省保険衛生局課長を務めるエリート女性官僚

まり：うつ病患者 クオリアが原因とされる殺人事件の犯人として拘留中

カズマ：榎田と共に逃亡した少年 クオリアを服用中

ユリ：榎田を敬愛し逃亡生活を支える

少女：若年性アルツハイマーを患い、聖ペトロ女子医大病院に長期入院中

磨木医師：聖ペトロ女子医大病院に務める心療内科の医師

研修医：聖ペトロ女子医大病院に務めるインターン

シスター：聖ペトロ修道会の修道女

看護師1：聖ペトロ女子医大病院に務める看護師

看護師2：聖ペトロ女子医大病院に務める看護師

●プロローグ 屋上

ビルの屋上。危うい足場に立つ榎田、そして縁を落ちそうになりながら歩くカズマとユリ。都会の夜を見下ろしている。生ぬるい風が静かに吹いている。

榎田「赤、緑、紫、あ、ほら、金色・・・白、黄色、青・・・きれいだね」

榎田「だけど覚えておいで。あの瞬いている美しい光たちも、黒、闇があつてこそ輝けるんだよ。見えない世界の苦しみたちが、輝ける光を支えているんだ。貧しい中のもっとも貧しい者、孤独の中のもっとも孤独な者、儂い中のもっとも儂い者の存在が、光を光たらしめているんだ」

榎田「でもね、夜が明ければ全てが変わるよ。約束しよう。全てが変わるんだ。あれほど輝いていた光は蒸発するかのように霧散し、闇は裏返しになり新しい姿で生まれ変わる。愛する者を呼ぶべき名で呼び、ただまっすぐに身をさらすことが出来るようになるだろう。さあ、朝が来るぞ。リカ子・・・」

●第一幕 a m 7 : 0 0 交差点

都会の交差点。行き交う人と雑踏。逃亡したカズマとユリの捜索を続ける刑事。

刑事「くそ、朝になっちゃったよ、夜通しの聞き込みも成果無しか・・・署に帰りづらいなあ・・・しかし暑いなあ、もう10月だっていうのに、地球温暖化は誰が止めてくれるんですかねえ？アメリカ？中国？それともやはり、文明大国わが日本？いやそりゃないな、無理無理。原発ひとつ止めらんないのに温暖化阻止なんて、あー無理無理。どうしてこう損得抜きで人類のために頑張ろうって国になんないのかねあ。憲法なんて変えても変えなくてもいいからさ、ハートをチェンジしようよ。お、すごいいいこと言っただけ？え、うそ、どうした？俺。うん、この夏のおれのテーマ「ハートをチェンジ！」これでもいい。しかし暑い・・・インド人もびっくりだぜ・・・カズマたち、どこにいるんだよ？はあ・・・ああ7時かあ、署に戻んなきゃ。あんまり時間ないなあ。富士そばでいいか、朝飯朝飯」

●第二幕 a m 9 : 0 0 病院医局

聖ペトロ女子医大病院。

カンファレンス中の心療内科医・磨木。看護師と研修医が熱心に聞いている。

磨木「じゃあもう一度確認する。312号室の山川のおばあちゃんはカドヴァリン3mg増やして様子を見よう。それから、202号室の門倉さんだけどき、

行動療法、もっと積極的にやるように、担当、しっかり指導してよ。こっちがいくら頑張ったってあれじゃ治るものも治らないからね。それから、ベッドに余裕はないけど、どんどん出てってもらわないと病院がつぶれるっていう事務方の口癖なんか鵜呑みにしないこと。あとは・・・あ、403号室の澤リカ子さんは予定通り今日のお昼に退院でいいよね？特に変わりはないんでしょ？」

看護師1「はい、今のところは落ち着いています」

磨木「入院当初は大変だったからね。OK、じゃあ、今朝のカンファレンス終了。解散」

研修医「先生！」

磨木「ん？なに？」

研修医「あの、この間、警察病院に応援で診断に行きましたよね？」

磨木「うん、行ったけど。それが？」

研修医「今、噂になってて。その案件って、クオリア事件の少年ですよね？」

磨木「・・・うん、まあ、そうだけど」

看護師2「確か、赤井カズマ君でしたっけ？」

磨木「何で知ってんの？・・・だったら、なに？向こうはあの手のケースが手薄だから応援を要請してきたんでしょ？」

研修医「だったらなになって・・・その少年、先生の診断のあと、警察病院逃げ出したんですよね？ユリって少女と一緒に」

磨木「だから？」

看護師1「仮にも殺人犯ですよ、その少年は」

看護師2「明日、退院する403号室の澤リカ子さんもクオリアの事件の関係者でしょう？なんだか怖いねって、みんなちよつとそわそわしてるんです」

研修医「自分たちもつい最近までは新薬クオリアを患者さんに服用させていたわけじゃないですか・・・ところがクオリアは殺人を誘発するわけでしょう？」

磨木「まだそうと決まったわけじゃない。それに、クオリアの薬害裁判でも原告側が訴えを取り下げたし、我々医療者があまり不用意に騒ぐべきじゃない」

研修医「でもあれは・・・ねえ？」

看護師1「うん。あれはお金が動いて、アメリカン製薬側が、無理やり裁判を終わらせたんだって・・・」

磨木「だれがそんなこと」

研修医「週刊帝都にそう書いてありますよ」

磨木「週刊帝都？」

研修医「これです。このページ」

磨木「・・・スクープ、クオリア薬害裁判、不自然な終結。新薬クオリアの背後に潜む闇・・・なにこれ、どうせ週刊誌お得意のでっち上げ記事よ。まったく・・・週刊帝都って言ったら帝都新聞傘下の一流誌じゃなかったのかしら。誰が書いてるの・・・日下部太一？ふざけた男ね」

● 第三幕 a m 9 : 3 0 病院食堂

聖。ペトロ女子医大。ランチタイムの食堂。

談笑しながら食事中の看護師1と2。離れたテーブルで一人食後のコーヒーを飲む磨木。

看護師たちにちよっかいを出しながら入ってくる日下部。

笑いながら出ていく看護師たち。

ゆっくり磨木に近づく日下部太一。

日下部「(どんぶりと半券を見て) あらあ、カツ丼ですか？朝からパワフルだなあ、さすが一流の医師は違いますね。僕もなんか食べようかなあ、あ、あれにしよう、焼うどん」

磨木「いけませんか？夜勤明けなんです。日下部さんでしょ？用件を言ってください。この後もスケジュールが一杯なもので」

日下部「あ、いけない。すみません、じゃ、改めて、これ、名刺です。すいません、突然ご連絡したりして。心療内科医の磨木先生ですよね？」

磨木「・・・帝都新聞記者、日下部太一、週刊帝都の記者じゃないんですか？」

日下部「えへへ、ちよつと色々ありましてね、少し前に出向になりました」

磨木「出向？」

日下部「しばらく静かにしていろつて、部長にほっぽり出されちゃいましたね」

磨木「なんかまずいことでもしたんですか？」

日下部「まあちよつとね・・・いやあ、しかしすばらしい病院ですね。床もびかぴかだし、天井にはほら、シャンデリア！まるで高級ホテルみたいだ。一日何人くらいの患者さんがいらつしやるんですか？この聖。ペトロ女子医大病院には」

磨木「・・・平均で1日、1000人くらいですかね」

日下部「1000人！それはすごいなあ！診療費が一人¥5000だとしたら・・・1,10,100で¥500万円！¥10000だとしたら、一日で1千万円！わお、こりややめらつれないですね！」

磨木「そんなに簡単なもんじゃありませんよ。カズマ君のことでしょう？」

日下部「あたり！先生、話が早いや」

磨木「・・・」

日下部「クオリアの事件はご存知ですよね？」

磨木「なんとなくはね。あなたの記事、読みましたよ」

日下部「それは嬉しいな。転属してすぐ、締め切りギリギリセーフ、滑り込みで入稿出来ました。それじゃあ簡単にお教えしておきましょうか？」

磨木「別に・・・勝手にどうぞ」

日下部「先生もよくご存じの新薬クオリア。もちろん以前は、先生も患者さん

に処方していましたよね？」

磨木「・・・ええ。もちろんまだクオリアに問題があると取りざたされる前の事ですよ」

日下部「どうでした？クオリアの効き目は」

磨木「・・・まあ、正直、素晴らしかった・・・これまでもパキシル、サインバルタ、リフレックス、抗うつ薬もいろいろ進化してきましたが・・・こんな薬が発明されたことが信じられないくらいに・・・、劇的な効果を発揮しましたよ」

日下部「なるほどね。主観的体験による質感の共有」

磨木「よく知っていますね」

日下部「勉強しましたものー！」

磨木「・・・」

日下部「(咳払い) 続けましょう。榎田秀司博士が開発したうつ病の新薬クオリアは、その圧倒的な効き目でアメリカ、そして日本においても大人気になりました。医者も患者もクオリアに夢中になった。うつ病は年々、患者数がうなぎ上りでしたからね、特効薬と知った政府が特例としてクオリアの認可を早めたという話もあります。しかしある時期から、クオリアが原因と思われる殺人事件が多発。あわてた政府はクオリアの使用を禁止、厚生労働省は事件の鎮圧と究明にやっきになった。しかしそんな中、開発者である榎田秀司博士は自殺。今だ、新薬クオリアの謎は解明されていません」

磨木「新薬クオリアの謎？」

日下部「(うなずき) クオリアがどのようにして殺人を誘発するのか、そしてもうひとつ、榎田秀司は何故クオリアの開発を行ったのか。うつ病患者を殺人鬼に変えるような恐ろしい薬の開発をね」

磨木「榎田博士の動機、つてことですか？」

日下部「僕はね、先生、その2つの謎の答えを、知ってるんですよ」

磨木「え？」

日下部「知りたいですか？いいですよ、先生ならお教えします。でも、その代わりに、先生が先日、警察病院で診断した、カズマ少年の話聞かせてくれませんか？彼とどんな話をしたんですか？」

磨木「君・・・」

日下部「僕はね先生、この事件にはまだまだ裏があると感じてるんですよ。新聞記者の勘ですがね。先ほども言いましたが、部長の命令で僕は今、週刊帝都の記者です。一見、左遷に見えるこの出向ですが、僕にとってはラッキーだった。新聞より雑誌のほうが自由が利きますからね。読むほうも、どうせ雑誌に書いてあることなんて半分は嘘だろうって思ってますからね。圧力と戦うノウハウも雑誌のほうが勝ってる。僕、思うんですけど、この人事、部長のメールじゃないのかなって」

磨木「メール？」

日下部「出世しちゃいましたけど、うちの部長、昔はごりごりの社会派記者だったらしいんですよ。だから、クオリアに関する事件の真相究明、僕にやれって言ってる気がしましてね」

磨木「でもそんな話を私にしてどうしようっていうんですか？私はずっとただの雇われ医師よ」

日下部「ふふ。話を戻しましょうか。一つ目、クオリアによる殺人誘発の謎、二つ目、榎田秀司のクオリア開発動機、そして最後、3つ目の謎。たくさんの謎を残したまま、榎田博士は・・・はい、先生、答えは？」

磨木「自殺してしまっただけ・・・」

日下部「と、思うでしょう？」

磨木「？」

日下部「いずれわかることだから教えちゃいますけど、榎田秀司の遺体の血液型が過去のデータと一致しなかったんです」

磨木「どういうことですか？」

日下部「さあ。3つ目の謎の答えは、僕もまだ知らない。先生、協力しませんか？榎田は過去に敗血症にかかって入院しました。その時の血液型のデータはAB型。しかし遺体の血液型はA型。入院していた病院は、ここ、聖ペトロ女子医大病院」

磨木「なんですって！？」

日下部「先生にお願いがあります。入院時の榎田のカルテ、調べて欲しいんです。この病院は、何かありますよ。匂うんです」

磨木「どうして私がそんなことを」

日下部「先生は去年、心療内科の医師としてこの病院に入られたばかりだ。聞くところによると大学病院の医局の軋轢は半端じゃないですね。先生の将来のためにも、本当のことを知っておいたほうが得なんじゃないませんか？」

磨木「・・・」

日下部「先生、申し訳ないけど調べさせてもらいましたよ」

磨木「・・・え？」

日下部「先生、5年前に16歳の少年を診察中に死なせていますよね？」

磨木「！」

日下部「分かっていますよ。事故だった、そうですね？少年は高機能広汎性の発達障害だった。いわゆるアスペルガー障害。彼は先生をずいぶん慕っていたそうですね。ところが、診察中に持っていたカッターナイフで自分の喉をかき切り自殺してしまっただけ。先生の結婚の話を知ってね」

磨木「私は・・・」

日下部「そのせいで結婚も取りやめたんですよ。お気の毒です」

磨木「・・・」

日下部「事故ですよ、先生、事故。だけど、クオリアによる殺人事件をおこし

てしまった逃亡中の犯人、カズマ少年の担当医が依然起こしていた事故を世間が知ったら、どう思うんでしょうね？」

磨木「私は、彼の担当医なんかじゃない！ たった一度、頼まれて診断をしただけで」

日下部「同じですよ。同じことなんです。世の中っていうのはそういうものなんですよ、先生」

磨木「そんな・・・」

日下部「だから、僕に手を貸してくれませんか？ 悪いようにはしませんからね？」

磨木「・・・お断りします。診療中の事故について、私にはやましいことはありません。・・・どちらにしても、医者には守秘義務がある。患者の話を外部の人間にするつもりはありません。まして週刊誌になど・・・。失礼します」

日下部「あ、先生！・・・逃げられた。でも、あきらめませんよ、僕は記者ですから。さて、10時か。澤先輩の退院準備でも手伝いに行くか」

#### ● 第四幕 a m 1 0 : 0 0 澤の病室

退院の準備をする澤。最後の検温と荷造りの手伝いをする看護師1。

看護師1「平熱ですね」

澤「お世話になりました」

澤の病室に少女が遊びに来る。

少女「お姉ーさん！」

澤「あら、どうしたの？」

少女「お姉さんは、好きな人いる？」

澤「え？ どうしたの、急に」

少女「だから、好きな人よ、彼氏でもいいし、片思いの人でもいいし、いるの？」

澤「うん・・・いたわ、多分」

少女「多分？ 変なの、自分の気持ちでしょ？ 私はね、うふふ、いるのよ」

澤「まあ、素敵」

看護師1「おませさんね」

少女「うふふふふ」

そこにシスターが現れる。

シスター「あらあら、ずいぶん楽しそうね」

少女「いけない！シスターの来る時間、すっかり忘れてたわ」

シスター「あなた、すっかり気に入られちゃったわね。今日、退院なんですよ？」

澤「あ、はい・・・」

少女「リカ子さん、今日、退院しちゃうの？」

澤「・・・ごめんね、そうなんだ」

少女「うそ・・・ひどい・・・なんで教えてくれなかったの！？リカ子さん、ひどい！」

部屋を飛び出していく少女。

澤「あ・・・」

看護師1「ちよつと見てきますね」

澤「お願いします」

心配して追いかける看護師1。

シスター「事前に言っておったんでしょ？退院の事」

澤「・・・はい」

シスター「彼女の病気、知ってるのね」

澤「はい・・・看護師さんに聞きました」

シスター「そう・・・若天性アルツハイマー、しかも極めて若い。昨日話したことも、時にはさつき見たものも忘れてしまう。あんなに良い子が、神も仏もありません・・・って、いけない、私が言ったら元も子もないわね」

澤「・・・かわいそうで仕方がない。せめて、少しの間だけでも、一緒に笑っていてあげられたらなって」

シスター「ありがとう、優しいのね」

澤「いえ、私は・・・私も時々、全部忘れちゃうから・・・」

シスター「人間はね、忘れた方がいいことは忘れるように出来ているのよ。だから、忘れてしまったとしたら、忘れるべきことだったと思えばいいの。思い出せなければ、それまでのことだったのよ、きっと。だってほら、あの子、あなたの事はまだ忘れていないじゃない？」

澤「ありがとう、シスター」

シスター「いいえ、神のご加護を」

病室に入ってくる日下部。

日下部「澤さん、あれ、お客様ですか？」

シスター「いいのよ、話は済んだわ。あら、あなたは彼氏？背は小っちゃいけど、なかなかベビーフェイスな男前じゃない？」

澤「シスター、違いますよ。彼はただの大学時代の後輩です」

日下部「日下部っています。初めましてシスター」

握手を求める日下部。

シスター「悪いけど、紳士はむやみにレディの手を握ろうとするべきじゃないわよ。握手はまた、次お会いしたときに。では、失礼するわ（出ていく）」

日下部「レディだって、ははは。でもなんでシスターが？」

澤「友達の女の子のメンタルヘルスのケアよ」

日下部「ああ、この間、話してた若年性アルツハイマーの」

澤「うん、もう少しだけ、見守ってあげていたかったわ。なんて、自分のケアも出来ない医師が言えた義理じゃないわね」

日下部「仕方ないですよ、あんなことの後じゃ誰だって……」

澤「……でも、博士の遺体の件はどうなったのかしら……別人かもしれないって」

日下部「まあまあ、そのあたりの事は僕に任せて、澤先輩はしばらくゆっくり休んでください。ね？あ、ほらもう、退院する時間ですよ。行きましょ（荷物を持つ）」

澤「……ええ……ありがとう」

部屋を出る二人。

### ●第五幕 a m 10 : 30 澤の病室

澤の退院した病室に忍び込む看護師の服を着たカズマと、パソコンを持ったユリ。

カズマ「あれ？いないよ」

ユリ「本当ね。トイレかしら？」

カズマ「どうする？ユリ」

そこに少女が現れる。

ユリ「……あ、お嬢ちゃん、この部屋に入院している澤リカ子って女の人知

らない？」

少女「知らない」

ユリ「そう。あなたはここに何しに来たの？」

少女「会いに来たのよ」

カズマ「誰に？」

少女「知らない」

カズマ「変なやつ」

少女「ふん、男の子嫌い」

カズマ「なんだよ」

ユリ「カズマ、やめなさい」

カズマ「ちえ」

そこに研修医と看護師2が入ってくる。

研修医「あれ？君たち、ここで何しているの？リネン？」

看護師2「すぐ次の患者さん、入室してくるから急ぎなさい。あなたは自分の部屋に戻りなさい」

少女「ふん！」

看護師1が戻ってくる。

看護師1「ここにいたの、心配したじゃない」

カズマ「澤リカ子はどこに行ったの？」

看護師1「澤さん？あら、もういない」

看護師2「澤さんなら、ついさつき退院したわよ」

カズマ「ちきしよう、間に合わなかったか」

研修医「間に合わなかったかって・・・なんか見ない顔だな？新人？君たち本当に病院の」

カズマ「うるさい！！」

看護師1, 2「キヤー！」

ユリ「カズマ！」

研修医「カズマ？カズマってまさか・・・君たちもしかして!？」

カズマ「わー!!!」

ユリ「カズマ、ダメよ！」

研修医「わ！やめろ！」

研修医たちに襲い掛かるカズマ。

もみ合ううち、カズマが少女の首に注射器をあてがい人質にとる。

研修医「やめろ、落ち着け！頼むから落ち着いてくれ！」

興奮しているカズマ。

カズマ「出ていけ！早く、出ていけ！」

研修医「わかった、出ていく。わかったから、その子には何もしないでくれ、頼む」

カズマ「わかった、分かったから早く出ていけ」

恐る恐る部屋を出ていく研修医たち。

すこしずつ落ち着いてきて少女を離すカズマ。

少女を気に掛けるユリ。

ユリ「大丈夫？ごめんね。痛くなかった？カズマ！謝りなさい！」

カズマ「・・・ごめんよ」

少女「ううん、いいわ。痛くも怖くもなかったもの」

カズマ「本当にごめん、僕時々、自分が分からなくなっちゃうんだ」

少女「ふーん」

ユリ「どうするの？カズマ」

カズマ「わからないよ、榎田先生はこの部屋に澤リカ子がいるから、連れてきておくれって言ったきり、どこかへ行っちゃったもの。こっちは連絡取れないんだし」

ユリ「逃げたほうがいいんじゃないかしら？」

カズマ「もうだめだよ（外の様子を伺い）外はもう大騒ぎだ、チクシヨウ」

少女「ねえ」

ユリ「なに？」

少女「あたしと遊ばない？」

●第六幕 a m 1 1 … 0 0 病院ロビー  
人の多い病院ロビー。

日下部「会計済みました？薬は？」

澤「大丈夫。心配性ね、君は」

日下部「たった一人の大事な先輩ですからね。心配もしますよ」

澤「ありがとう」

日下部「あれ？今日はなんだか素直ですね」

澤「悪い？いつもみたいにいく？」

日下部「いえいえ、たまにはいいですよ、そんな澤先輩も・・・俺がついてますからね」

澤「え？なんか言った？」

日下部「いや、なにも。それじゃ、行きますか」

そこに刑事が現れる。

日下部「あ、刑事さん」

刑事「おー、間に合った！澤先生、またひとつ、相談に乗ってくださいよ」

日下部「だーめ！澤先輩は今退院してきたばかりなの！ゆっくり休ませたいんだから、近寄らないでよ！わ、なんか汗くさい！しっしっ！」

刑事「ひどいなあ、人をバイ菌みたいに・・・そりゃ3日も風呂に入っていないけど・・・まあいいや、このくらいまで下がれば話していいの？」

日下部「そういう事じゃないだろ？なんでこんな奴に退院の日教えたんですか？」

澤「私も事件の関係者だから、所在は明確にしておくように言われてて。いいですよ、刑事さん、なんですか？相談って」

刑事「ご協力感謝します！先日、警察病院を逃げ出したカズマとユリ、榎田博士の患者の。彼らの居場所に心当たりがないかなあって。もう3日間も探してるんですけど、有力な目撃情報もなく、ほとほと困り果てる次第です。特にこの暑さで汗が出るわ出るわ・・・あれ、澤先生？どうかしましたか？」

日下部「バカ野郎！・・・澤先輩は知らなかったのに。だからしばらくそっとしておいてくれて言ってるだろう！」

刑事「あわわわ・・・どうしよう、ごめんなさい・・・」

澤「カズマ君たちが、逃走した・・・」

日下部「澤先輩・・・」

騒然としたす病院内。研修医が慌てた様子で、

研修医「大変だ！警察、警察を呼んでくれ！」

日下部「なんだ、どうしたんだ！？なにかあったのか？」

看護師2「それが、それが・・・」

刑事「一応、私、警察官ですが」

看護師1「良かった、何とかしてください！」

刑事「なんとかって、いったい何があったんですか？」

研修医「カズマ少年が、少女を人質にして、病室に立てこもりました！」

刑事「なんだって!？」

日下部「カズマって、警察病院を逃げ出して逃走してるあのカズマか!？」

研修医「(うなずき) 澤さんが出ていかれた病室へ、次の患者の準備のために行ったんです。そうしたら、カズマともう一人の女が病院の制服を着て、少女と話をしていたんです」

澤「少女って・・・まさか!？」

研修医「はい、いつも澤さんの部屋に遊びに来ていたあの少女です」

刑事「見つけたー、カズマとユリを見つけたー!ふー、これで家に帰れるぞー!」

日下部「馬鹿!一人でどうしようってんだよ!おい、待って」

病室へと駆け出す刑事を追う日下部。

各所へ散る研修医と看護師たち。

呆然とする澤。そこに柏木が訪れる。

柏木「澤先生」

澤「あ、柏木さん・・・」

柏木「何かあったの? 顔色が悪いわよ」

澤「・・・カズマ君たちが、少女を人質にして、病室に立てこもりました」

柏木「なんですって!？」

澤「たぶん、私に会いに来たのよ」

柏木「澤先生に?なぜ」

澤「理由は分からないけど、きっとそうに違いない」

柏木「・・・刑事さんから、今日、澤先生が退院するって聞いて、どうしても確認したい事があって、失礼とは思いますが来てしまいました」

澤「私に確認したい事? いったい何ですか?」

柏木「澤先生、あなた、榎田秀司博士が自殺をした時、どうしてそばで倒れていたんですか? あの時、何があったんですか?」

澤「・・・」

柏木「榎田博士から来たメールを頼りに、日下部さんが博士の居場所を特定したことはわかるわ。その情報を厚生労働省である私や、警察に渡さなかったことはもういい。まずはご自分が榎田博士と話をしたかった気持ちも分からない

ではないから。でも、なぜあの時、あなたも一緒に倒れていたの？榎田博士がワインに入った青酸カリを飲みほして自殺を図ったのは、あなたが倒れる前？それとも後？」

澤「私は・・・榎田博士が私と話をしている最中に服毒して亡くなったことがショックで気を失ったんです。だから、答えは、前です」

柏木「じゃあ、何を話していたの？無くなる最後の言葉はなんだったの？」

澤「・・・それをなぜ、あなたに教えなければいけないのかしら？厚生労働省にそんな権限が出来たなんて聞いていませんけど」

柏木「・・・」

澤「カズマ君のところに行かなければ」

柏木「もうひとつ、もうひとつだけ」

澤「なに？」

柏木「あの日、あなたの目の前で死んだのは、本当に榎田秀司だったの？間違いない？」

澤「・・・ええ、たしかよ」

もどつてくる日下部。

日下部「澤さん、大変だ！刑事さんが少女の身代わりになるって言って、一人で病室に入って行っちゃったよ！僕は応援を待ってって言ったのに、かっこつけやがって」

澤「馬鹿ね・・・あの子たちは、私を探しに来たのよ」

病室に向かう澤。

一緒に戻ろうとする日下部。

柏木「日下部さん！」

日下部「ん？ああ、柏木さん。今大変なことが起きちゃってるんだよ」

柏木「あなたは、死んだ榎田秀司を、本物だと思う？」

日下部「・・・柏木さん、気は確かですか？・・・まさか、なにか知ってるんですか？」

柏木「あなたこそ、何か知ってるんじゃない？」

日下部「僕が？何を？」

柏木「あなたも疑っているんでしょ？死んだ榎田秀司は本当に本人だったのかって」

日下部「・・・」

柏木「あなたは榎田秀司に拘束されていた。その時、彼と何を話したの？教えて」

て。聞いたんでしよう？なぜ彼がクオリアを開発する必要があったのか」

日下部「知りませんよ、僕はそんなこと」

柏木「隠さないで。そんなにスクープが欲しい？」

日下部「(苦笑) 欲しいですね、スクープ」

柏木「それじゃあ」

日下部「え？」

柏木「先に私が話すわ。それならいいでしょう？」

日下部「さあ」

柏木「榎田秀司には弟がいた」

日下部「弟！？」

柏木「そうよ。彼の過去を色々探っていくうちにわかったの。でもその弟は死亡したことになっている」

日下部「死んでいる？」

柏木「榎田の父親は、こちらもすでに亡くなっているけど、外務省のエリート外交官だった。各国の大使を歴任。榎田秀司が6才になった年、榎田一家はインドに居たわ。父親がインドのコルカタにある日本領事館に総領事として赴任したの。知っての通り、インドの貧富の差は激しい。経済発展に伴い、大都会と呼ぶべきオフィス街のすぐ横に、物乞いをする子供や女性が溢れている。知っている？現地のマフィアたちは子供たちを誘拐し山間の村に連れ去り調教するのよ」

日下部「調教？」

柏木「ええ。物乞いをしやすくするように、さらった子供たちの手足を切り落したり、失明させたりするの。そうして一日中、いえ、一生を路上で過ごし、恵んでもらった数ルピーはマフィアたちに巻き上げられてしまう」

日下部「・・・ひどいな」

柏木「榎田秀司の弟も5歳の時、誘拐された」

日下部「なんだって！？」

柏木「地元警察も全力で探したようだけど、結局見つかることが出来ず捜査は打ちきり。遺骨もないまま葬儀をあげたそうよ。息子を見殺しにしたという負い目から、父親は弟の存在をなかったものにしたのよ」

日下部「・・・まさか！自殺した榎田は弟だったなんてことが！？・・・」

柏木「可能性は、無くはないわ。遺体の血液型が符合しない点も、それで説明はつく。部下の調査によると榎田はある時期、情報処理の博士号取得を目的に、インドのジャワハルラーネルー大学に留学経験があるのよ。その時期に弟に再会したのかも」

日下部「じゃあ僕が話をしたあの男・・・足を引きずりながらクオリアの開発動機やアメリカ軍の・・・足を引きずっていた？」

柏木「どうしたの？日下部さん？」

日下部「柏木さん……榎田秀司は……なぜ足を引きづっていたんでしょう？」

●第七幕 a m 1 1 : : 0 0 検事室

検察庁。検事の部屋。

喜和子「検事さん……カズマはどこにいるんでしょうか？」

検事「警察も必死に探していますから、大丈夫、すぐに保護されますよ」

喜和子「だけど、すでにもう3日です……こんなことになるなら訴えを取り下げることに同意なんかするべきじゃなかった。こんなことになるなら」

検事「過ぎたことを悔やんでも仕方がない。確かに、クオリアの薬害裁判はあんな形で終わらせるべきじゃなかった。だがすでに、あなた方はアメリカン製薬側の示談を受け入れてしまった。おそらく、クオリア事件の真実が白日の下にさらされることは二度とないでしょう。しかし」

喜和子「……しかし？なんですか？」

検事「私はこの事件を追求し続けます。自分の気が済むまで、何年かかっても」

喜和子「検事さん……」

検事「大丈夫、弟さんは必ず見つかりますよ」

喜和子「ごめんなさい」

検事「……なぜ謝るんですか？」

喜和子「あなたは本当に私たち、クオリアの薬害被害者のために戦ってくれていた。それなのに、私たちは本来同志であるはずのあなたを裏切った。裏切って、アメリカン製薬の示談を承諾してしまった。だけど信じてください！私は……私たちは、賠償金欲しさに退いたんじゃないやありません。本当です、ただ、意味の見いだせない裁判に、疲れ果ててしまったんです」

検事「わかっていますよ」

喜和子「それなのに、これからのことが不安で、途方に暮れたすえに結局、私はまた、あなたを頼ってしまった。ひどい話ですよね」

検事「あまり自分を責めるもんじゃない。あなたは悪くなどありませんよ。悪いのは、クオリアなんかを開発して世の中を混乱に落とし入れ、命を絶ってしまった榎田秀司ですよ。だから、あなたは、これからのご自分とカズマ君の事だけを考えていけばいいんです。私も、お手伝いしますから」

喜和子「検事さん……ありがとうございます」

検事「それより、腹がすきませんか？いえ、ご予約があるなら構いませんが、でももし、お時間があるなら、近くに安くてうまい洋食屋があるんですよ。こんなに大きなハンバーグで、そのデミグラスソースがまた……あ、すみません」

喜和子「(笑)」一緒に帰ります」

検事「そうですか！じゃ、行きましょう！11..00か、ちょっと早いけどいいですよ？うん、混んじやう前に行った方がいい」

出かけようとしたとき検事の携帯電話が鳴る。

検事「あ、ちよつと失礼・・・なんだって！・・・わかった、すぐに向かう」

喜和子「どうかなさったんですか？」

検事「・・・ええ」

喜和子「なんだか顔色が悪い・・・」

検事「カズマ君が・・・弟さんが見つかりました」

喜和子「なんですって！？どこで、カズマはどこにいるんですか？」

検事「聖。ペトロ女子医大病院です」

喜和子「聖。ペトロ・・・」

検事「カズマ君が、少女を人質にして、病室に立てこもりました」

喜和子「そんな！？・・・行かなくちゃ」

検事の携帯電話が鳴る。

検事「ちよつと待つて・・・どうした？・・・なんだと？・・・わかった・・・」

喜和子「どうしたの？カズマに何かあったの？」

検事「・・・カズマ君たちから要求が出た」

喜和子「要求？いったい何を」

検事「本庄まりを釈放して連れて来い。彼はそう要求しているそうです」

喜和子「なんですって！？」

## ●第八幕 a m 1 1 .. 3 0 病室

拘束された刑事。楽しそうなカズマとユリ、そして少女。

刑事「捕まっちゃたー！騙されちゃったよー！」

カズマ「うるさいなあ、もう」

ユリ「眠らせちゃう？」

カズマ「そうするか」

刑事「待て待て！なんで、君、仲間になっちゃてるの？俺がせっかく助けに来たのに」

少女「ふふふ、だって楽しいんだもの」

刑事「楽しいって・・・犯罪だよ、これは」

カズマ「別にこんなことするつもりじゃなかったのに、部屋に入ってきた人が騒ぎ出して、気が付いたらこの子を人質にしちゃって、だから僕・・・ごめんよ、絶対に傷つけたりしないって約束するからね」

少女「うふふ、本当にもういいのよ。そんなことより次の問題出してよ」

刑事「問題？」

ユリ「おじさんもやる？」

刑事「おじさん・・・で、こんな時に問題ってなんだよ」

ユリ「サイコパス診断よ」

刑事「サイコ・・・パス？」

ユリ「いいからいいから。面白いのよ。では問題です」

刑事「・・・」

ユリ「あなたは今、お葬式に出席しています。あなたには下に同性の兄弟が一人います。そしてそのお葬式に、あなたのとでも好きなタイプの異性が訪れました。しかしあなたの兄弟も、その人のことが、とても好きなタイプなのをあなたは知っています。あなたは兄弟を殺してしまいました。どうして殺してしまったのか？お答えください」

カズマ「えーと、なんだろう・・・えーと」

刑事「・・・兄弟に」

ユリ「兄弟に？」

刑事「兄弟に、その人をとられちゃう気がしたからじゃないの？違う？」

ユリ「これは診断だから正解は無いのよ。でもその答えは、一番一般的な答えよ」

カズマ「うあー、つまんない男！」

刑事「うるさい！じゃあ、お前の答えはどうなんだよ！」

カズマ「僕はね、その人が自分の兄弟を好きになっちゃうことは、耐えられないから、かな」

ユリ「カズマらしい回答ね。じゃあ、あなたは？」

少女「私？」

カズマ「うん。なんだか面白そう。教えて、教えて」

少女「私は・・・多分・・・兄弟を殺せば、もう一度お葬式が行われて、もう一度その人に会えるから」

刑事「・・・へえー・・・はは・・・あ、そう」

ユリ「あなた、面白いわね。そうだ、あなた名前は？」

カズマ「僕はカズマ。赤井カズマ」

ユリ「私はユリ。よろしくね」

少女「私？私は・・・名前捨てちゃったの」

カズマ「捨てた？」

少女「うん。だって私は私、それでいいじゃない？」

ユリ「じゃあ、なんて呼べばいいの？名前がないのは、少し不便だわ」

少女「そう？それじゃあ、今からあなたたちで私に名前を付けてくれない？気に入ったら、私、返事をするわ」

カズマ「へえ、面白そう。ではでは・・・あ！ウサコはどう？なんとなくウサギぼくないかな？」

ユリ「なんだか適当な感じね。あ！スマイルなんてよくない？ニコニコしてて、笑顔がとっても素敵じゃなくて？」

カズマ「えー、犬の名前みたいだろ。かわいそうだよ」

ユリ「あら、カズマだってウサコなんて、レデイに失礼よ！ねえ？」

少女「(笑)」

カズマ「刑事さん、なんかかない？」

刑事「え？俺？・・・」

カズマ「そう。なんかかない？いい名前」

刑事「えーと・・・そうだな・・・あ、それじゃあ、パジャマなんてどうかかな？可愛いパジャマが良く似合ってるよね？どう？・・・だめ？だよね」

ユリ「いいじゃない！」

刑事「えー！？」

少女「うん、素敵！可愛いし、夢があるわ」

カズマ「本人も気に入ってるし、決まりだね！」

少女「やったー！今から私のことは、パジャマって呼んでね」

刑事「採用！・・・されてる場合か・・・」

不意に気が滅入るカズマ。

ユリ「カズマ、どうかしたの？」

カズマ「・・・まりはどうしているかなって」

ユリ「まりなら大丈夫よ。あなたも言っていたじゃない。まりは大丈夫、あの子はガッツがあるって」

カズマ「それはそうだけど・・・前みたいに皆で一緒にいたいなって」

ユリ「今はしようがないわよ。ドウジはあれ以来眠り続けたままだし、フミコはこれまで以上に本を読み続けられる環境を気に入って、一緒に逃げることをしなかったんだし」

カズマ「あきらめがいいだね。僕はユリみたいに簡単には割り切れないよ」

ユリ「割り切っているわけではないわ。割り切れないことも世の中にはあるって事よ。円周率みたいに」

ふいに円周率を唱え始めるユリ。徐々に興奮し高揚していくユリ。

カズマ「そうだ！」

ユリ「・・・何よ、驚くじゃない！146桁までいったばかりなのに！この先、152桁からの数字の配列が特に美しいのに！意地悪だわ、カズマ」

カズマ「そんなことより、いいことを思いついたのさ！」

少女「何？面白い事？」

カズマ「うん！まりをこの部屋に呼ぼう！そうしてまた一緒にいようよ、ずっと、ずっとさ」

ユリ「でもどうやって？」

カズマ「忘れたのかい？僕らには人質がいるんだよ。二人もね」

### ●第九幕 12：30 拘置所

拘置所の拘束室。検事と同席した喜和子。

拘束されたまり。時々、時計を探している。

検事「本庄まりさん・・・あれから少しは落ち着きましたか？」

まり「時計が見たいの。お願い、検事さん。時計をつけてください、この部屋に」

検事「それは・・・攻撃性のある容疑者には凶器となりえるものは与えられない」

まり「もう二度と暴れたりしません！・・・だからお願いです・・・正確な時間を知りたいだけなんです・・・どうか、お願いします」

検事「すまない・・・規則だ」

まり「だったら何のためにまたノコノコ現れたの！？榎田先生は死んだのよ！私はもう一秒だって生きていたくなんかない！早く殺せ！死刑にでも何にでもしなさいよ！・・・ねえ、さっさと殺して・・・生きていてもしょうがない・・・先生・・・お願い、もう一度だっこして・・・」

検事「気持ちは分かるが」

まり「分かるわけじゃないじゃない」

検事「・・・いや、それは」

まり「検事さんは死にたいと思ったこと、ある？」

検事「・・・あると思うが」

まり「うそ」

検事「・・・」

まり「私はね、生まれたときからずっと、朝起きたその瞬間から死にたいのよ。」

毎朝毎朝、今日が来たことを呪ってきたわ。だけど、榎田先生に会って変わったの。クオリアを頂いて飲むようになってから、私は目覚めたとき海の中にいるの。どこまでも透き通った美しい海を、ゆらゆら揺れながらゆっくり漂っていく。そして気が付いたの。私は、最初から生きてなんかないって」

喜和子「生きてなんかない？」

まり「ええ。生きてるから苦しいの。だから生きても死んでもいない、私はどっちでもない場所で、時間だけを眺めている。ゆっくり時間の海を漂い続けるだけ。それから朝が怖くなくなったわ。でも・・・」

喜和子「でも？」

まり「時間は止まってしまった・・・だからもう、完全なる消滅だけを望みます。どうか殺してください」

喜和子「まりさん・・・」

検事「・・・申し訳ないが、私にその権限はない。私はただ、真実を追求するために」

まり「検事さん」

検事「・・・なんだ？」

まり「何か隠してるわね？」

検事「いや、別に私は」

まり「うそ。私に用があつてここに来たんでしょ？だったらなぜ何も言わないの？」

検事「・・・カズマ君たちが人質を取って、ある場所に立てこもった」

まり「カズマ達が？元気のね、良かった！でもなぜ？何のためにそんなことを」

検事「わからない、ただ」

まり「もったいぶらないで教えてください。検事さん」

検事「君と人質との交換を要求してきた」

まり「まあ」

検事「我々としては人質の命を最優先と考えて、君を釈放することを決定した。しかしあくまでも一時的にだ。逃げられるとは思わないでほしい」

まり「素敵！さすがカズマとユリだわ、ああ早く会いたい」

検事「・・・それじゃあ、行こうか」

係官と共にまりを連れ、出ていく検事と喜和子。

## ●第十幕 13:00 病院別室

別室に集まった澤、日下部、柏木、研修医。

研修医「どうしたらいいんだ!? 僕のせいであの娘が人質になってしまった。なぜあの時もっと抵抗できなかったんだ! 臆病者! 人でなし! 冷血漢! くず人間! おかま野郎!」

日下部「君、落ち着けよ。大丈夫、刑事も一緒に部屋にいるんだから。あ、それが逆に心配の種か・・・」

柏木「日下部さん、さっきの話だけど・・・」

日下部「ああ、なんだか喉が乾いちやったなあ! 柏木さん、喫茶室でアイスコーヒーでも飲みましょうよ」

柏木「今はいいわ」

日下部「僕がよくないの! さあ、ほら」

柏木「・・・わかったわよ」

日下部「澤先輩に変な話しないで下さいよ」

出ていく日下部と柏木。

入れ違いに入ってくる磨木。

研修医「あ、先生!・・・すみません、僕がすぐに気がついて対応出来ていればこんなことには・・・」

磨木「しょうがないわよ。君のせいじゃない。あとは警察に任せよう」

研修医「・・・はい」

磨木「山川のおばあちゃんが君を探してたわよ。君じゃなけりや、点滴の針刺させないって、ごねてるらしいから、早く行ってあげて」

研修医「はい!」

磨木「君を頼りにしてる患者さんがたくさんいるんだから、ほら、しっかりしろ」

研修医「わかりました。失礼します」

出ていく研修医。

磨木「澤さん・・・ちよつといいですか?」

澤「ええ・・・大変なことになりましたね」

磨木「本当に・・・何だってこんなことに」

澤「あの子は無事なんでしょうか? アルツハイマーの」

磨木「今のところ怪我人は出ていないようです。落ち着いている様子ですし」

澤「え?」

磨木「モニターがあるんですよ。防犯カメラのような。各部屋に設置されています」

澤「そうなんですか。じゃあ私も入院中は見られていたんですね、知らぬ間に誰かに」

磨木「あくまでも患者さんの安全の為です」

澤「わかっています。特に精神疾患の患者は治療が進んだように見えて、いつパニックを起こして非常事態に陥るとも限りませんものね。あ、釈迦に説法ですな」

磨木「澤先生」

澤「・・・どうしたんですか？先生だなんて」

磨木「先生はカズマ君を良くご存じだったんですか？」

澤「いいえ。彼は榎田博士の患者でしたが、研究所ではなく博士の自宅で診察を受けていたので会ったことはありませんでした」

磨木「そうですか・・・」

澤「何か気になることがありませんか？私で良ければ伺いますよ。先生は恩人ですから」

磨木「私が？恩人？」

澤「ええ。尊敬していた恩師、榎田博士に目の前で自殺されて、錯乱状態に近かった私を救い出してくれたのは先生ですから。私は精神科医である自分が、精神に異常を来すなんて考えてもみなかった。だけど先生はそんな私におっしゃてくれました。医者だって人間だ、大丈夫、あなたならバラバラになったパズルのピースを元通りにできる。ゆっくり自己分析しなさいって。あの言葉に本当に救われたんです。そうだ、私は精神科医なんだって、アイデンティティを取りもどすことが出来た。感謝しています」

磨木「私はただ、自分より優れている同業者に、自分で治せてって意地悪をしただけですよ（笑）」

澤「（笑）じゃあ次は私が治療しましょうか？さあ、心を開いて、なんでもお話し下さい」

磨木「・・・先生は・・・自分の患者に自殺されたことはおありですか？」

澤「いいえ。ありません」

磨木「そうですか」

澤「それは、磨木先生がご自分の患者さんに自殺されたことがあると受け取ってよろしいのでしょうか？」

磨木「・・・はい、結構です」

澤「今でもそれを悩まれて？」

磨木「診察が始まったと受け取ってよろしいですか？」

澤「ええ、どうぞ」

磨木「忘れたことはありません。忘れられるわけがない。だけど、今、気になっっているのはカズマ君のことです」

澤「・・・」

磨木「私は先日、警察病院の要請を受けて、カズマ君の診断を行いました。それ以来、彼のことごとくも気になっていました」

澤「似ていたんでしょ？」

磨木「え？」

澤「自殺した先生の患者さんに、似ていたんでしょ？」

磨木「さすがですね・・・そのとおりです・・・その子は治療中に、私の目の前で頸動脈をカッターで・・・」

澤「カズマ君も自殺をすると感じたんですか？」

磨木「ええ。私が診断に行ったとき、彼は錯乱と虚無を繰り返していました。彼はあなた同様、目の前に横たわる、服毒自殺した榎田博士を見たはずですから。カズマ君の様子は、本当に、自殺してしまった私の患者の少年そのものだったんです。だから、カズマ君も自ら命を絶ってしまうんじゃないかと心配していたんですが」

澤「だけど彼はここに現れた」

磨木「彼を、カズマ君を助きたい・・・あの時の償いになるとは思わないけれど、私はどうしても彼を助きたい」

澤「彼は私を殺しに来たような気がします」

磨木「え？」

澤「私が現れたことで博士は死んだ。あの時、彼の目にはそう映ったと思います。だから」

シスター「命をもってしか、証明できないものなのかもしれませんね。愛というのは（陰から現れる）」

磨木「シスター・・・」

シスター「ごめんなさい、聞こえてしまったものだから」

澤「かまいません。むしろシスターのお考えをお聞きしたいです」

シスター「私の？」

澤「ええ。事件の後、私はシスターに問いました。榎田博士はなぜ自殺したのかと。それも私の目の前で。シスターはお答えくださいましたよね。主イエスはゴルゴダの丘で磔にされて亡くなられた。すべての人々の罪を全て引き受けてと」

磨木「全ての罪を引き受ける？」

澤「それは、博士もすべての罪を引き受けて命を絶たれたということですよね？」  
シスター「そうだと言ったわけではありません。ただ、そうせざる得なかったように私には感じられたのです。まるで誰かを、何かを守るために亡くなられたような、そんな気がしてならないのですよ」

澤「そうかもしれませんね。そうだとしてシスター・・・イエス・キリストは復活されたんですよね？」

シスター「そうです。復活されましたよ、亡くなってから3日目に」

澤「博士も復活したんでしょうか？」

磨木「澤先生、何を言い出すんですか？」

澤「私・・・なんだか、博士が生きてるような気がしてならないんです」

磨木「そんな馬鹿な・・・だって現にあなたの目の前で亡くなったんでしょう？」

澤「そうです。私の目の前で亡くなったのに・・・どうして血液型が違うんでしょう？」

磨木「あ！・・・」

澤「磨木先生？」

磨木「いえ、別に」

シスター「澤さん」

澤「はい」

シスター「普通の人間が死んでから復活する事なんてありえません。いいえ、あつてはならないのよ」

## ●第十一幕 15:00 病院食堂

パソコンに向かってしている磨木。そこに日下部が入ってくる。

日下部「あれ？先生お一人ですか？」

磨木「・・・あ、記者さん・・・」

日下部「日下部です」

磨木「・・・」

日下部「どうですか？先生、僕に手を貸してくれる気になりましたか？」

磨木「お断りしたはずです・・・でも」

日下部「でも！なんです？調べてくれる気になりましたか？榎田秀司の入院時のカルテ」

しぶしぶといった感じでパソコンを向ける磨木。

日下部「わお、先生、話わかるじゃないですか」

磨木「言っておくけど、あなたの脅しに屈してデータベースにアクセスしたわけじゃないですから」

日下部「脅しだなんてひどいや、先生。あくまでもビジネスライクな話で」

磨木「榎田博士の謎を解くことが少しでもカズマ君を助ける力になればって、そう思っただけです」

日下部「まあ、いいですよ、調べてもらえるなら理由はなんだって・・・ふんふん・・・なるほど・・・特に変わったことはないですかね？これを見る限り」

磨木「いいえ、大ありですよ」

日下部「え！？どこどこ？何を見つけたんですか？」

磨木「ここ」

日下部「ここ？・・・アカウンツ？お会計ってことか・・・キャッシュ？これのどこがおかしいんです？」

磨木「たいがい、いえ99パーセント以上、ここはヘルス・インシュランス、健康保険適用って記載されるのよ」

日下部「そうか！日本人なら通常、なんらかの健康保険に加入していますもんね！たしかにこんな高額な治療費を現金で支払うなんて、なにか特別な理由がありそうですよね」

磨木「考えられるのは健康保険に加入していなかったか、それとも」

日下部「それとも？」

磨木「入院した事実を知られたくなかった・・・」

日下部「インドで敗血症を患った榎田秀司は、なぜ密かに治療を受けたのか・・・か」

磨木「あ、支払いをしたのは榎田本人じゃないですね」

日下部「え？誰なんですか？」

磨木「聖ペトロ修道会・・・」

日下部「修道会？いったいどうして？」

磨木「ネットで検索してみましようか？」

日下部「お願いします」

磨木「聖ペトロ修道会・・・キリスト教の修道院で・・・インド、コルカタを本拠地とし」

日下部「インド！コルカタ？よっしゃー、繋がったー！」

磨木「どうしたんですか？日下部さん」

日下部「わかったんですよ、三つ目の謎の答えが！」

磨木「どういうこと？」

日下部「いいですか？榎田秀司は青酸カリを飲んで自殺した。ところがその遺体と、昔この病院に入院していた時の血液型のデータが一致しなかった。何故なら、遺体と入院していた人間は別人だということですよ」

磨木「別人って言ったって・・・」

日下部「先生、榎田には弟がいたんですよ」

磨木「弟！？」

日下部「それもおそらく瓜二つ、榎田秀司にそっくりな一つ年下の弟がね」

磨木「そんな、いったいどこに？」

日下部「インドです。インドのコルカタで、乞食同然に暮らしていたんです。外交官だった榎田の父親がコルカタに赴任していた時、まだ5歳だった榎田の

弟はマフィアに誘拐された。父親は外務省での自分の地位に傷がつくことを嫌い、その事件を闇に葬り去った。しかし時は流れ、インドに留学した榎田は弟に再会し、日本に連れて帰ったんだ。父親には内緒で」

磨木「それを手助けしたのが、この病院と関係のふかい、聖ペトロ修道会……」

日下部「そういうことになりませぬ」

磨木「じゃあ、自殺した遺体は……」

日下部「そう、きつと身代わりにされた、榎田の弟の遺体ですよ！」

## ●第十二幕 17:00 病院屋上

“夕焼け小焼け”を歌うユリ。そのまわりで幸せそうなカズマとまり。そして目隠しをされて拘束されたままの刑事。目隠しをとられ

刑事「どこだここは？屋上？病院の屋上か？……わあ！榎田秀司！榎田博士、どうしてこんなところに……」

榎田「やあ、刑事さん。はじめまして」

刑事「やあ、ってそんなお気楽に……どうなってんだ？いったい……夢でも見ているのか？」

榎田「刑事さん、私はカラスが好きでね。あの黒く光った羽の光沢も、饒舌な鳴き声も素晴らしいと思うんだが、どうですか？そうは思いませんか？」

刑事「はあ？カラス？カラスってあの、カー、カーってカラス？」

榎田「旧約聖書のノアの方舟の話は知っていますか？」

刑事「何だよ、いきなり……馬鹿にすんなよ、それくらい知ってるよ」

榎田「それは優秀（手をたたく）。神の啓示により洪水後の新しい世界に放たれるべく、すべての生物のつがいに乗せられたノアの箱舟。当然、その中にはカラスも存在したわけだが。40日間の大雨、150日間の浸水の末、あまねく地上にはびこった水もようやく減少の兆しをみせ始め、アララトの山頂に漂着したノアは、周囲の様子を計るために箱舟の中からハトを飛ばした。しかし、まだすべてが水没していて、どこにもとまることができなかつたため、ハトは箱舟へと戻ってきてしまう。7日後、ノアが再びハトを放つと、今度はハトはオリーブの小枝を啜えて戻ってきた。更に7日後、もう一度ハトを放つたが、もうハトは戻ってこなかった。ノアは水が引いて生活できる地面が現れたと判断し、箱舟から出て神に感謝の祈りをささげた」

刑事「なんだよ、カラスじゃなくてハトの話じゃないか」

榎田「実はね、ノアはハトを放つ前、カラスに同様の任を託し、箱舟から放っていたんだ。しかし、このときカラスは戻ってこなかった。カラスが戻ってこなかった理由、それは『己がふるさと太陽に向かって一直線に飛び去ってしまった』というわけだ」

刑事「……それがどうした？」

榎田「行くんだよ、我々も」

刑事「行く？ いったいどこに。あ、俺はいかないよ、やだよ！ 腐ってもここが好きなんだよ。絶対置いてって」

榎田「(笑) ちなみに、つがいのうち1羽が飛び去ったにもかかわらず、カラスが新しい世界で滞りなく、いやむしろ他を圧倒して繁殖している理由については、数千年後の現在でも謎に包まれたままだ」

刑事「いやいや、カラスの繁殖はいいとして、あんた、なんで生きてんの？ たしか1ヶ月前に青酸カリ飲んで、死んじゃったよね？ ね、そうだよ？ お前も見えてた？」

カズマ「馬鹿だなあ、あんなトリックも見破れないで、よく刑事なんかやってるね」

刑事「トリック？」

ユリ「死んだと見せかけて、博士はこの病院に搬送されたのよ。この聖ペトロ病院にね」

カズマ「そして死亡診断書だけ作って、博士は一応、死んだことになってるわけ」

刑事「そんな馬鹿な！ そんな馬鹿なこと誰が言ったんだよ！？」

ユリ「聖ペトロ修道会のシスターよ」

刑事「シスター？」

カズマ「そう。シスターが博士を助けてくれて、僕たちが捕まっていた警察病院まで教えに来てくれたんだ。博士は生きてるって」

ユリ「(うなずき) 逃げる手はずもつけてくれたわ。だからこうしてまたみんなと一緒に居られるのよ」

まり「お会いしたいわ、早くそのシスターに。声の大きな検事さんが、博士は自殺したなんて言うものだから、私気が動転してしまっただけ。よかった、本当によかった」

榎田「約束したろう？ みんなで行こうって。カズマ、リカ子にはまだ会えていないのかい？」

カズマ「ごめんなさい、博士。一足先に退院しちゃったみたいです。でも必ず、連れてきますよ」

ユリ「まだ病院内にいる可能性があります。さつき病院のセキュリティカメラにハッキングして、玄関前の映像をチェックしたんですが、澤リカ子さんが外に出た様子は見つかりませんでしたから」

榎田「そうか」

そこに少女が現れる。

刑事「あれー！？ 君、どうして戻ってきたの？ 本庄まりの釈放と交換条件で、君を開放したのに。君が戻ってきちゃったら、俺の立場がないだろう？」

カズマ「最初からないんじゃないの？立場なんて」

刑事「うるさい！まったくどいつもこいつも・・・あ、そうだ！おい、よく聞けよ。お前ら全員、ハートをチェンジ！」

カズマ「・・・は？」

刑事「だから、ハートをだなあ・・・」

榎田「カズマ、眠らせておあげ」

カズマ「はい、博士」

刑事「おい、なにすんだ？やめろ、やめ・・・」

眠気と戦う刑事。

カズマ「うるさい人だな。だけどパジャマ、どうして戻ってきたのさ」

少女「わたしがいると邪魔？いないほうがいい？」

カズマ「そんなことはないよ。もう僕たちは友達なんだし、ずっと一緒にいればいいさ。ね？博士？いいですよ、パジャマもここにいて」

榎田「ああ、かまわないよ。お嬢さん、名前は？」

ユリ「パジャマよ。博士」

榎木「パジャマか。いい名前だね。誰がつけてくれたんだい？」

刑事「あ！（喜んですぐ気絶）」

ユリ「そんなことより博士、この後、私は何をすればいいかしら？」

榎田「さすがはユリ、誰よりも現実的で頼りになるな」

カズマ「あ、まるで僕が役立たずみたいに」

榎田「(笑)そんなことがあるはずないだろう。お前たちはみんな、私の同志だ。唯一無二の、家族だよ」

少女「いいな・・・」

榎田「君もだよ、パジャマ。君も一緒に行こう」

少女「いいの！？私も行きたい！でも、いったいどこへ行くの？」

シスターが現れる。

シスター「コルカタよ」

少女「あら、シスター！いけない、見つかったちゃった・・・でも、コルカタっていったいどこ？」

シスター「インドよ」

少女「インド・・・」

カズマ「知り合いなのかい？シスターと」

少女「ええ、そうよ。いつも一緒に祈りをするの」

二人だけで話を始める榎田とシスター。

シスター「・・・榎田さん」

榎田「なんででしょう？シスター」

シスター「あなたの大切な家族はこうして集まりました。今夜9時に迎えがきます。ここからあなたたちを必ず無事にお連れします。しかし、その時を逃せば、あなたは二度と彼の地へ赴くことは出来ないでしょう。いいですね？」

榎田「ありがとう、シスター」

シスター「ただ」

榎田「ただ？」

シスター「澤リカ子を連れて行くことは、お諦めなさい」

榎田「何故ですか？」

シスター「彼女が愛しているのは・・・あなたではない」

榎田「ではシスターは私に、一人でインドに帰れというのですか？つがいを失ったカラスのように、一人、箱舟に乗れと？冗談じゃない！見捨てられ、勝手に連れてこられ、そしてまた勝手に追い払われるというのか！？あなた方、聖ペトロ修道会がどんなに高貴で、どんなに敬虔な信仰を持つとうが私にはなんの価値もない！私に必要なのは・・・この子たちと、リカ子だけだ」

シスター「だから・・・だから榎田秀司、実の兄を死に追いやったのですか？」

榎田「死に追いやった？私はただ、私とリカ子の関係をあいつに教えただけだ。リカ子がどんな声で私を求め、どんな匂いを放ち、どんな動きで私を愛するのか、それを教えてやっただけだ」

シスター「・・・」

榎田「榎田秀司は、二人はいらないからね」

シスター「だけど、榎田博士は・・・お兄さんはあなたのために」

榎田「違うよ。あの男は、実験台として私を利用したんだ。自分が描いたクオリアという薬の開発を、私で実証していったんだよ。私は5歳の時にマフィアに誘拐されて、人間とは思えない仕打ちを受けてきた。おかげで左足は言うことをきかなくなった。そんな子供が自分を守るためには無になることだった。何も考えず、何も感じない、灰色の靄がかかったような地獄の住人になったんだよ。しかし、偶然にもあの男は私を発見し、あなた方の力を借りて私をこの病院まで連れてきたんだ。そしてクオリアによって、私の記憶や概念はあの男と共有させられたものばかりになっていった」

シスター「お兄さんはあなたを救いたかったのよ。あなたの失った人生を、もう一度一から歩ませよう」と

榎田「そうだとしても・・・リカ子が愛しているのが榎田秀司である限り、榎田は二人いてはならないでしょう？」

シスター「だったら・・・だとしたらあなたはあなたとして」

榎田「無理ですよ、シスター・・・私には・・・すでに名前さえないんです」  
シスター「・・・」

立ち去っていくシスター。

シスター「あなたたち、出発の前に思い残すことはない？」

顔を見合わせて首を振るユリとまり、そして少女。一人うつむいていたカズマが顔をあげて、

カズマ「姉さんに・・・最後に姉さんに会いたいな・・・」  
シスター「・・・わかったわ」

まり「博士、何を話していたの？」

榎田「・・・ちよつとした歴史の考察をね」

ユリ「歴史の考察？」

榎田「ああ、自殺したヒトラーが本物だったのか否か。そんなところだ」  
少女「ふーん？」

### ●第十三幕 18:00 病院別室

澤、磨木、日下部、柏木、検事、喜和子が揃っている。

沈黙だけが流れている。

日下部「・・・ふー！もう誰か何か話してくださいよ！僕、こういう空気、苦手なんだよなあ。ところで、ねえ、検事さん、どうしてカズマ君のお姉さんと一緒にいらしたんですか？しかも、本庄まりまで検事さん直々に連れてくるなんて。なんかあるんでしょ？教えてくださいよ」

検事「君・・・状況を考えたまえよ。今はそんなことより、無事にカズマ君たちを保護する手段をみんなで考えるべきじゃないのか？」

磨木「その通りです。少女は救出したけれど、もう一人、人質の警官を連れて屋上に移動して何をするつもりなのか・・・まさか」

日下部「集団自殺？」

喜和子「想像でおかしなこと言わないでください！カズマは絶対に死なせはしません」

磨木「・・・そうですね。絶対に死なせてはいけない」

そこに飛び込んでくる研修医と看護師たち。

看護師1「いないわ！どこにもいない！あ、先生！いないんです！」

磨木「どうしたの！？誰がいないっていうの？」

看護師2「女の子が、さきほど解放された人質の女の子がいなくなっちゃったんです！」

柏木「なんですって！？病室で介抱していたんじゃないの？」

研修医「そうなんですけど、トイレに行くと言って病室を出た後、警備の目をくらすように消えてしまったらしくて・・・ああ、どうしよう、なんとかしなくちゃ」

磨木「落ち着いて、手分けして探しましょう。手の空いてる人たちを集めて」

研修医と看護師たち「はい！」

柏木「私たちも探しましょう」

日下部「そうですね、ここでこうしても仕様がないですね。行きましょう」

検事「喜和子さんはここに」

喜和子「・・・はい」

検事「行こう」

日下部「指図しないでくださいよ」

検事「ふん」

部屋には澤と喜和子だけが残っている。

澤「仲がいいんですね」

喜和子「え？」

澤「いえ、確かクオリアの薬害裁判を、あなたたち原告団が取り下げたから、てつきり検事さんはあなた方に腹を立てていると思っていましたから」

喜和子「・・・」

澤「女は弱い。だから男に頼る。頼られた男は、女が敵だと知りながら、頼られた喜びに目がくらみ、女を助ける。いずれ裏切られるとしても」

喜和子「わたしは！・・・カズマの事を誰にも相談できなくて、検事さんなら、話を聞いてくれる気がして・・・裏切るつもりなんて、ありません」

澤「だけこのままじゃ、彼はあなたの弟、カズマ君を葬るわよ」

喜和子「彼が？なんで彼がそんなことを・・・検事さんはカズマのことを真剣に心配してくれています」

澤「あなたのことを、でしょ？」

喜和子「・・・わたし？」

澤「そう、あなたよ。彼が心配しているのはあなたのことよ。カズマ君じゃな

いわ

喜和子「たしかに彼は私のことも慮ってくれてはいるけれど、それは薬害被害者の親族として」

澤「うそよ。気付いているんでしょ？彼のあなたへの思いを」

喜和子「・・・そんな」

澤「あなたはそんな彼の思いを利用している。はっきり言うわ。あなたは弟を救うためにあの男をたぶらかしているのよ」

喜和子「違う！違うわ！」

澤「違うくない！だけど、私はそれをいけない事だとは言っていないわよ」

喜和子「・・・え？」

澤「可愛い、大事な大事な弟を助けるためだもの。あなたをしていることは当然だわ。でもね、よく考えてみてほしいの。彼は検察官よ。それも超エリートでとりわけ正義感が強くて、融通が利かない。いくらカズマ君が自分の愛した女性の弟だろうと、手は抜かない。きっちり法律にのっとった償いを求めてくるわ」

喜和子「どこに行こうとも、犯した罪は償ってもらおう。それが法治国家というもの・・・彼はそう言っていた」

澤「そうよ、彼は骨の髄まで検事だから。でもね喜和子さん、本当にカズマ君は罪人なのかしら？」

喜和子「・・・え？」

澤「彼は純粹で、とても心の美しい少年なんじゃないかしら。ね、そうでしょう？」

喜和子「そう、そうよ！カズマは本当に優しく、天使のような子なの。むしろ優しすぎて、清らかすぎるのかもしれない。だからきつと・・・」

澤「守りましょう。大切なものに、指一本触れさせてはだめよ。あの男は危険すぎる。知りすぎてるわ。このままにしておいてはいけない。わかるでしょ？」

喜和子「でも・・・どうしたら」

澤「喜和子さん」

喜和子「・・・はい」

何かの薬を取り出す澤。

澤「私はクオリアを守りたい。あなたはカズマ君を守りたい。その両方ともあの男は滅ぼそうとしている」

喜和子「（うなづく）」

澤「やりましょう。力を合わせて」

喜和子に薬（青酸カリ）を渡す澤。

検事が戻ってくる。

検事「大丈夫ですか？喜和子さん」

喜和子「・・・ええ」

澤「私、すこし外の風に当たってきます。すぐ戻ります」

出ていく澤。

検事「カズマ君たちが立てこもってから、すでに8時間以上経ちましたね。お腹を空かせてないかな」

喜和子「コーヒー・・・」

検事「え？」

喜和子「コーヒー・・・お飲みになりますか？」

検事「・・・ええ、いただきます」

振るえながら入れたコーヒーを検事に渡す喜和子。

カップを口に持っていく検事。

#### ●第十四幕 21:00 病院屋上

迎えを待つ榎田、カズマ、ユリ、まり、そして少女。シスターの横には眠ったままの刑事。

まり「そろそろ9時よ。正確にはあと、23秒、22、21、20・・・」

ユリ「ええ、もう少しで迎えが来るわ」

シスター「来たようですね」

ヘリコプターの降下してくる爆音と風。

着陸場所を探すサーチライト。

榎田「シスター、私は必ずリカ子を迎えに来ます。どんな方法になるにせよ、必ず」

シスター「・・・このまま彼女の前から消えてあげることが、本当の愛じゃないのかしら」

榎田「本当の愛？あなたは本当の愛を知っているのですか？」

シスター「当然です。私は主イエスに仕える……」

榎田「おやめなさい。もううんざりだ……」

シスター「……」

榎田「必ず、迎えに来ます」

へりに乗り込む榎田。

従いついて行くまり、ユリ。

カズマ「パジャマ、きみはやっぱり残ったほうがいい」

少女「え！？いやよ、なんでそんな意地悪を言うの？」

カズマ「意地悪なんかじゃないよ。君を連れてったりしたら、悲しむ人がいっぱいいるだろう？」

少女「そんな人……いないわ」

カズマ「いるよ。君が気が付いていないだけさ、きつと」

少女「……」

カズマ「少しの間だけだったけど、君といるとすごく楽しかった。だから君は、ちゃんと病気を治して、幸せになってよ」

少女「しあわせ？」

カズマ「そう、しあわせ」

シスター「……わかったわ」

シスターに手を引かれ、悲しそうな少女。

カズマ「どんなに離れてても、ぼくたちは友達だよ」

少女「……うん、私、絶対忘れない」

へりに乗り込もうとするカズマ。少女を振り返る。

シスターに連れられてその場を去る少女。

そこに警官の制止を振り切り、屋上にたどり着く喜和子。

喜和子「カズマ！待ちなさい、カズマ！」

カズマ「……お姉ちゃん……お姉ちゃん！」

喜和子「ああ、カズマ……私の可愛いカズマ……」

カズマ「お姉ちゃん……大丈夫！もうだれも傷つけてやしないよ。ほら、人質の刑事さんも眠ってるだけさ、ね？」

喜和子「……カズマ……」

カズマ「お姉ちゃん・・・もう二度と会えないかもしれないけど、僕はもう大丈夫だよ。みんなと一緒に行くんだ、心配しないで」

喜和子「ああ・・・」

カズマ「最後に会えて嬉しいよ、お姉ちゃん。今までありがとう、ぼくお姉ちゃんの弟で幸せだったよ。ごめんね・・・さようなら」

喜和子「・・・カズマ！」

カズマにナイフを突き刺す喜和子。

カズマ「・・・お姉ちゃん？・・・お姉ちゃん・・・」

喜和子の腕の中で絶命するカズマ。

喜和子「・・・カズマ・・・私の可愛いカズマ・・・」

青酸カリを飲み自殺する喜和子。

そこに飛び込んでくる検事。

駆け寄る検事。

検事の絶叫。

遠ざかっていくヘリの音。

### ●第十五幕 数日後 公園

紙コップのコーヒーをすする刑事と日下部、柏木。

日下部「しかし、ひどい幕引きだったなあ・・・」

柏木「本当に・・・結局、犯行動機は不明のまま主犯のカズマは死亡、共犯のユリ、そしてまりまで取り逃がしてしまった。おまけに姉の喜和子まで服毒自殺・・・頭がおかしくなりそう」

日下部「まったくですよね。澤先輩は、逆恨みしたカズマ達が澤先輩の殺害目的で病院を襲撃してきたって言ってましたけど、どうも納得できないんだよね・・・」

柏木「そうね・・・しかもあのヘリコプター、見た？」

日下部「見ましたとも。燦然と輝く星型のマーク」

柏木「アメリカ空軍よ」

日下部「榎田博士が言った話は本当だったんだな」

柏木「クオリアの開発、販売を最初に始めたのはアメリカン製菓。でもアメリカン製菓はダミー会社。その真の姿は・・・アメリカ国防総省ペンタゴン。なりふりかまわずクオリア事件の收拾に乗り出してきたわね。ところで日下部さんはこれからどうするの？」

日下部「はい、榎田秀司の行方を追ってみます。この人の記憶が本物ならね」  
刑事「本当だってば！何度言わせるんだよ・・・榎田秀司はいたの！他の事はいろいろモヤモヤつとしちゃってるんだけど（ぶつぶつ）」

日下部「今回の件でこの人、上に相当怒られちゃって、このままここにいられるか分かんないらしいんですよ」

刑事「ああ・・・ついてない、ちくしょう・・・あ、いけない、いけない！マインラス思考は不幸を呼び寄せるからな。そうそう、この秋の俺のキーワード、ハートをチェンジ！これだよ、これ」

日下部「懲りないなあ（苦笑）」

## ●第十六幕 1か月後 教会

シスターの教会を訪れた澤。

静かに流れる讃美歌と鐘の音。

澤「きれいな教会ですね。心が洗われるわ」

シスター「古い聖堂ですけど、あのステンドグラスは300年も前の物を特別に運んでもらったそうです。先人の知恵と、美に対する情熱にはまったく敬服します」

澤「シスターは・・・」

シスター「・・・なに？」

澤「シスターは死んだ人間は生き返らない、いえ、復活などしてはならないとおっしゃいましたよね？」

シスター「言いました」

澤「けど・・・会いたいんです。もう一度・・・あの人に」

シスター「・・・それは無理ね。榎田秀司は、あなたの目の前で亡くなったのよ」

澤「・・・そうでしょうか？本当に？」

シスター「（首を横に振り）おやめなさい。パンドラの箱を開ければあなたは・・・地獄へ落ちることになるわよ」

澤「私にとつてはとつくに、生きていることが地獄ですから」

シスター「私にはあなたが、また失うためにもう一度手に入れようとしているように思えるわ。一番大切なものを失うことで、自分をなにかの生贄にしているような。だからもう、おやめなさい。ただ」

澤「？」

シスター「あなたとあなたの会いたい人がソウルメイト、魂の伴侶であるなら、いつかまたきつと会えるでしょう。どんなに離れていても、どんなに時が巡ろうとも」

澤「・・・ご助言、ありがたく頂戴しておきます。来た甲斐がありました。シスター、お元気で」

お辞儀をして立ち去ろうとする澤。

そこにもう一人のシスターと、手をつないだ少女が現れる。

澤「あなた・・・元気そうね」

少女「お姉さん、だれ？」

磨木「澤先生、その節はお世話になりました」

澤「・・・磨木先生？」

シスター「悩みぬかれて、先日、私どもの修道会に入信しました」

磨木「私は結局、カズマ君も救うことが出来ませんでした。絶対死なせはしないなんて、偉そうに言ったのに、何一つできなかった。自分の患者を二人も死なせた私には、医者を続けることは・・・もう無理です」

澤「そうですか」

少女「お姉さん、どこかで会ったことがあるかしら？」

澤「・・・いいえ、はじめてよ。でも今日から、お友達になってくれる？」

少女「いいわよ。そうだ、お姉さん、好きな人いる？私はね、いるのよ！どんな人かは全然覚えてないんだけど、この気持ちだけは絶対忘れないわ！」

END